

「睡葬」

満ちた春に願わくば
朧月に囚われて

美しき死の在処へ

憧憬の香 薫き染めて

薄墨の褥のもと

我が命は風に散りぬ

枝垂れる桜に

真緒のただ赤きこと

ほどける指に

玉響の夜半つたう

浄めの白刃で

粧られた疵口から

孵化する蝶の

鱗粉の翡翠色

幽む臉を閉じて私は

湖に葬られた月光のように

灰い土の底で永遠に睡る

腐ちぬまま奇麗に

薄墨の褥のもと

運命は此処にあらんと